

令和 3 年 6 月 19 日現在

機関番号：32702

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23042

研究課題名（和文）明清時代の謎語における俗文学作品の受容に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the integration of folk literature into Riddles of Ming-Qing period

研究代表者

FAN KEREN (FAN, KEREN)

神奈川大学・外国語学部・助教

研究者番号：80848044

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は明清時代に人気を博した戯曲や小説から、謎語（謎かけ）に多く引かれる『西廂記』と『聊齋志異』を選び、この二書の謎語に見られる受容状況に考察を加えた。前者は曲文の内容が謎かけの問題、答え共に多く引かれており、時代が下るにつれ、これまでに使われたことのない『西廂記』の内容を引き、新しい謎語を作るか、作中の同箇所が謎底とされる場合はその謎面を変えることによって新しさを生み出そうとするような謎語の作者たちの試みが強く窺える。一方、後者の謎語における引用はほとんど篇名であり、戯曲の改作や同作品を使う酒令の引用を含めて見れば、当時最も人気のあった話は複数の美人が登場する話であることが分かる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は民間で広く遊ばれた謎語の中から戯曲や小説と関わりのある内容を集めて分析することによって、従来『西廂記』や『聊齋志異』のような戯曲や小説に関する研究ではあまり詳しく考察されていない受容の一端を新たに提示した点で意義があると考えられる。

また、灯謎をはじめとする謎語は中国民俗文化の重要な財産の一つであり、『西廂記』や『聊齋志異』の謎語における受容状況を解明することで、謎語をめぐる民俗文化をより深く理解する糸口を提供することができる。

研究成果の概要（英文）：This research selected the Romance of the Western Chamber and Strange Stories from a Chinese Studio from the operas and novels of the Ming and Qing Dynasties which has gained many readers, and studied the acceptance of the two works by investigating their related riddles.

Content of the Romance of the Western Chamber are frequently quoted in the riddles. From these quotations, we can see that with the change of the times, the riddler tends to create new riddles by making use of the content of the book that has never been employed. When the content of the book has been used as the answer, the riddler will change the question part of the riddle to show innovation.

In contrast, the quotations from Strange Stories from a Chinese Studio in riddles are almost all titles. These quotations, together with other adapted works based on the book, indicate that the most popular story type in Strange Stories from a Chinese Studio at that time was the story with several beautiful women appearing.

研究分野：中国明清文学

キーワード：西廂記 聊齋志異 謎語 受容

1. 研究開始当初の背景

中国の謎語の歴史を遡ると、先秦時代に諧謔や諷諷に用いられた「隠語」に辿り着く。時代の変遷につれ、謎語はやがて多様に派生し、南宋・周密著『武林旧事』には臨安(現在の杭州市の一部にあたる)の「灯市」(飾りちょうちんで飾られた町)の様子が詳しく描写されており、宋代では灯笼に謎を書き、その答えを人々に当ててもらう遊び、すなわち「灯謎」が現れたことが分かる。

明代に入って戯曲や小説の創作が盛んに行われるようになるとともに、灯謎や酒令のような遊びにも戯曲や小説と関わりのある内容が大量に取り込まれたことは、明代に編纂された日用類書や『金瓶梅』のような小説から分かる。

清代に入ると、「四書五経」『千字文』のような知識人の必読書が酒令や灯謎に多く取り込まれる一方、『西廂記』をはじめ、『琵琶記』『三国志演義』『水滸伝』『牡丹亭』『紅樓夢』『品花宝鑑』『聊齋志異』等の戯曲や小説を直接引用して作られた謎掛けやそれらの作品の内容に基づいて作られた謎掛けも大きな割合を占めるようになった。例えば、企社が咸豊六年(1856)に刊行した『竜山灯虎』には、八百一条の灯謎が収録されており、その内『西廂記』と関わりのある謎語は全体の八分の一を占める。さらに、『風月鑑』『花月痕』『二十年目睹之怪現狀』等の小説には『西廂記』と関わりのある灯謎を当てる場面が描かれている。

このように、戯曲や小説と関わりのある謎語は明清時代において、民間の遊びとしてだけでなく、小説の材料としても使われているため、これらの作品の受容状況を考える上で、重要な一側面であると考えられる。しかしながら、戯曲や小説に関する先行研究では、版本や作者問題、作品自体の受容について盛んに考察が行われているものの、酒令、灯謎のような遊びに見られる戯曲や小説の受容については、簡単な紹介もしくは概説に終始している。明清時代に現れた『西廂記』関連の謎語は千を越えており、『水滸伝』『紅樓夢』『聊齋志異』のような小説も少なからず謎語に引用されている。これらの謎語には特徴や共通点はないのか、当時はどのように評価されていたのか、どのような場面で遊ばれたのか、またそれぞれの作品と関わりのある酒令などと何らかの繋がりはあるのかという一連の疑問が浮かび上がってくるのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、明清時代に作られた数多くの謎語作品集に収められている戯曲や小説と関わりのある謎語を細かくかつ全面的に分析することによって、各戯曲や小説の受容状況を従来の研究では深く掘り出されていない民間の遊びという角度から新たな見解を提示することにある。

3. 研究の方法

本研究においては、まず明清時代に編纂された謎語作品集から、戯曲や小説と関わりのある謎語を抽出し、年代順に整理することによって各戯曲や小説と関わりのある謎語はいつ頃現れたか、また時代によって引用される作品に偏りがあるのか等を明らかにする。

次に、抽出された謎語に戯曲や小説からの直接的引用があれば、その引用箇所を特定し、各引用箇所の数を統計することによって、各戯曲や小説のよく引用される部分を明らかにする。また、作品からの直接引用ではなく、作品に基づいて間接的に作られた謎語については、作品と具体的にどのような関係があるのかを分析する。

さらに、戯曲や小説と関わりのある各謎語作品集所収のすべての謎語を分類することによって、各戯曲や小説と関わりのある謎語が占める割合を知ることができる。各謎語作品集の成立時期や作者の経歴などによって所収作品の割合に差が出るか否か、またその原因を分析する。

最後に、明清時代の随筆、謎語作品集の序跋等の資料と結び付けつつ、戯曲や小説と関わりのある謎語は実生活のどのような場面で人々に楽しまれたのか、どのように評価されていたのか、またほかの文学作品に影響を与えたのかについても考察を行う。

4. 研究成果

筆者はまず『西廂記』と関わりのある謎語に着目し、それらの謎語から見る同書の受容を考察した。それは『水滸伝』『西遊記』『紅樓夢』のような長篇小説は長さの関係で謎語に取り込まれにくい要素があるのに対し、人気がどの戯曲や小説にも負けない『西廂記』は、その物語の簡潔さと精練された内容によって、戯曲や小説の中で、最も多く酒令や謎語に取り込まれる作品となったからである。

そこで、『中華謎語集成』(人民日報出版社、1992~1997)に基づき、明清時代に作られた『西廂記』と関わりのある謎語をすべて整理・分析し、これらの謎語に共通する特徴、時間・空間によって差異が生じるかどうかについて検討した。

次に、明清時代に刊行された謎語作品集の序跋文を確認し、『西廂記』に言及される記述から、同作品は当時どのように扱われているのかについて確認した。

さらに、明清時代に刊行された謎語評論集、随筆集や日用類書などの資料を用いて、『西廂記』

と関わりのある謎語はどのように評価されているのか、同作品に関わる酒令などとの関わりについて分析した。

以上の考察を踏まえて、論文「謎語から見る『西廂記』故事の受容 明清時代を中心に」(『中国中世文学研究』第73号、中国中世文学会、2020)としてまとめた。

李開先の『詩禪』や明代の酒令を広く集めた『新刻時尚華筵趣楽談笑酒令』から、明清時代では、『西廂記』と関わりのある謎語は、元宵節に人々に当てさせて楽しむだけでなく、普段の酒席でも酒令としても遊興に供されたことが分かった。また、明清時代に作られた複数の謎語作品集に考察を加えたところ、明代に作られた同作品と関わりのある謎語の一部は、清代に入っても継承されていることが分かった。一方、これらの謎語作品集から、これまでに使われたことのない『西廂記』の内容を引き、新しい謎語を作るか、作品中の同じ箇所が謎底とされる場合はその謎面を変えることによって新しさを生み出そうとするような作者の試みも強く窺える。以上の論文のほかに、『西廂記』の江戸時代における受容状況の研究成果の発信を英語論文「Transmission and reception of the Xi xiang ji (Romance of the Western Chamber) during the Edo period」(『表現技術研究』第15号、広島大学表現技術プロジェクト研究センター、2020)で行った。

次に、明清時代に多くの読者を獲得した小説から、謎語に多くの篇名が取り込まれている『聊齋志異』を選び出し、清代では、『聊齋志異』をはじめとする志怪小説のうち、どのような作品がよく知られていたかについて考察を加えた。

従来の研究では、『聊齋志異』の版本考、本事考、人物形象研究は盛んに行われてきたものの、民間の遊びとしての謎語に着目して『聊齋志異』の清代における受容状況を分析する研究が未だ行われていない。

そこで、まず『中華謎書集成』に基づき、清代の『聊齋志異』と関わりのある謎語を整理し、これらの謎語に謎底として使われる『聊齋志異』の篇名の使用頻度を集計した。

次に、『聊齋志異』所収の話の種類を分析し、謎語の謎底として使用頻度が高い篇名はどのような種類の話に属しているかを考察した。

さらに、『聊齋志異』から取材された清代の戯曲や同時代の酒令に引用される同書の篇名を考察し、謎語における同書の受容状況と共通する部分があるか否かを検討した。

最後に、『聊齋志異』以外に、清代の謎語の謎底として使われる志怪類の作品『諧鐸』と『夜譚隨録』の引用状況を考察し、『聊齋志異』の謎語における受容の共通点を分析した。

以上の考察を踏まえて、論文「謎語から見る『聊齋志異』の受容 清代を中心に」(『人文研究』第202号、神奈川大学人文学会、2021)としてまとめた。

『聊齋志異』所収の話は狐、鬼、人という登場人物の属性とは関係なく、大まかに「奇人異事」、「勸善懲惡・時弊批判」、「美人賢妻」の三種類に分類することができる。そこで、清代に作られた謎語における『聊齋志異』の引用を見ると、引用数の上位にある「果報」「陸判」「美人首」「織成」などはそれぞれ「奇人異事」類、「勸善懲惡・時弊批判」類、「美人賢妻」類に属しているため、どの種類にも人々によく知られ、好まれる話が少なからずあることが分かる。その中でも、清の中葉に成立した志怪小説『諧鐸』所収の「雉媒」を含め、『聊齋志異』の「美人賢妻」類の話、特に「双美」のような一夫多妻の話は、謎語だけでなく、酒令や子弟書にも多く取り入れられたり、戯曲の改作も複数存在したりすることから、これらの話は様々な経路で、深く民間に浸透していたと考えられる。また、韓春農の『三惜書屋謎稿』や葛姓の『余生虎口虎』所収の『聊齋志異』と関わりのある謎語の多くは「美人賢妻」類の篇名であることから、『聊齋志異』は当時の知識人たちに社会問題を考えさせる本でありながらも、くつろぎの場における男性の遊興に資する内容の多くは、理想的な美人が描かれる艶話から取っていることが窺える。

本研究によって、『西廂記』と『聊齋志異』と関わりのある謎語はこれらの二書のどの部分を取り込んだのか、実生活のどのような場面で人々に楽しまれたのか、ほかのジャンルの作品と繋がりがいいのか、といった問題が解明され、両作品の受容の一端を従来の研究とは異なる角度から考察できた。なお、前述したように、これらの二書のほかに、今でも絶大な人気を博している「四大名著」をはじめ、明清時代に作られた多くの戯曲や小説も少なからず謎語に取り込まれている。これらの作品に関する受容問題を研究していく上で、従来あまり注目されていない謎語、酒令、対聯のような深く民間に浸透したジャンルの作品に考察を加えることによって、新たな視座を提示できると期待される。これを今後の課題としたいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 樊可人	4. 巻 73
2. 論文標題 謎語から見る『西廂記』故事の受容 明清時代を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国中世文学研究	6. 最初と最後の頁 88-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Fan Keren	4. 巻 15
2. 論文標題 Transmission and reception of the Xi xiang ji (Romance of the Western Chamber) during the Edo period	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 表現技術研究	6. 最初と最後の頁 39-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 樊可人	4. 巻 202
2. 論文標題 謎語から見る『聊齋志異』の受容 清代を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文研究	6. 最初と最後の頁 41-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------